加工業務用に適した短節間カボチャ「栗五郎」の畝幅と収量

短節間品種「栗五郎」は，畝幅を5mから3mに狭めることで，果実品質を維持したまま商品果収量は約30%増加

背景・目的

・加工業務用カボチャ生産では，青果用と比較して販売単価が低いため，低コスト多収栽培が求められている
・短節間品種「栗五郎」は「えびす」などの従来品種に比べて，つる長が短く，密植栽培で単収向上の可能性がある
・「栗五郎」の単収向上に向けた畝幅と収量の関係解明が必要

成果の内容

・畝幅3mは慣行5mと比較して1果重は同等
　⇒10a当たり収穫果数が増加し，商品果収量が約30%増収（図1）

・畝幅2mは雌花開花期に茎葉が重なり，20節以降の雌花が枯死（図2）
　⇒10a当たり収穫果数及び商品果収量は畝幅3mに比べ減少（図1）

・果実の乾物率及びBrixは，畝幅の差はない

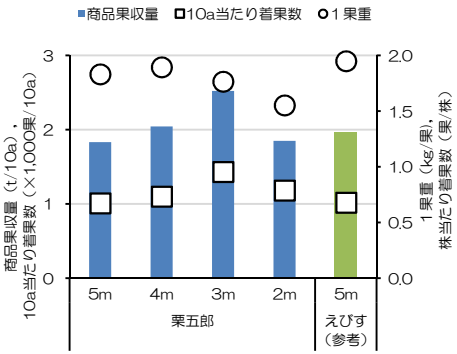

図1　畝幅と1果重，着果数，収量

図2　受粉期の茎葉と20節付近の雌花の様子（左：畝幅3m区，右：畝幅2m区）
注）20節付近の雌花は，3m区は開花するのに対して，2m区は開花に至らず枯死

※試験は令和元年，2年の2か年実施し，いずれの年度も播種は3月25日，収穫は6下旬～7月上旬に実施
株間は35cm，主枝は親づるを使用し，初期のみ誘引，10節以降の側枝は放任，自然受粉での試験結果

期待される効果

○「栗五郎」の密植栽培で単収・所得向上

○加工業務用カボチャの安定供給

○大規模経営体の夏期品目として導入
（トンネル資材・受粉は不要，整枝も初期のみで省力的）

○普及対象・範囲
　加工業務用カボチャ生産者

鹿児島県農業開発総合センター大隅支場
園芸作物研究室